
❖ 応用研究部門 ❖

研究展示

みんなちがって、みんないい。
童謡詩人金子みすゞ展～まなざしの源泉～

2025 年 6 月 5 日（水）～6 月 26 日（水）10:00～16:00

龍谷大学大宮学舎 本館 1 階展観室

❖ 概 要 ❖

本展示会は、現在世界中に広がり、親しまれている童謡詩人 金子みすゞの作品がどのようにして生まれたのか、その源泉を辿ることをコンセプトに開催されました。各部屋ごとに展示品の概要を紹介します。

■（北）第一室 みすゞを育んだもの～本・お仏壇・報恩講～

第一室では、みすゞが幼少期に触れあった児童書や仏壇を中心とした展示が行われました。みすゞの幼少期は大正デモクラシーの時代でもあり、児童書発展の時期でもありました。本屋を営んでいたみすゞは幼少期より児童書に接する機会も多く、後のみすゞ作品にも大きな影響を及ぼしたことが窺えます。加えて、みすゞの故郷である山口県大津郡仙崎（現長門市）は、浄土真宗や浄土宗などの信仰の篤い地域でもありました。みすゞの家にも仏壇があり、本尊の阿弥陀さまに掌を合わせていたことが、みすゞが遺した数々の作品からも窺うことができます。みすゞの中で阿弥陀さまの存在は決して小さなものではなかったでしょう。そこで、第一室では、金子みすゞが直接手に取って読んでいたであろう、明治・大正期に刊行されたアンデルセン童話などの児童書や、『少年園』

『少女世界』といった少年誌・少女誌、『お伽絵解』『日本昔噺』といった絵雑誌・絵本を中心とした展示が行われました。加えて、金子みすゞが掌を合わせていたであろう近代期の浄土真宗の仏壇も展示されました。

■（中）第二室 金子みすゞの手帳

第二室では、金子みすゞの遺した 3 冊の遺稿手帳のレプリカが展示されました。金子みすゞは 20 歳で「童謡」を書き始めます。これまで抑えられていたものを噴き出すかのように、作品を生み出します。しかし、生前発表されたのはわずかに 90 編ほどでした。しかし、みすゞの没後 50 年が経過した時、矢崎節夫氏がこの手帳の存在をつきとめ、512 編ものみすゞ作品が「甦り」ました。今ではよく目にする「私と小鳥と鈴と」「こだまでしょうか」「星とたんぽぽ」もこの時に甦った作品たちです。このように第二室では、これらの作品が書かれたパネルとともに、遺稿手帳を観覧していただきました。

■（南）第三室 みすゞ作品の掲載誌と展開

第三室では、金子みすゞが作品の投稿を行っていた『赤い鳥』などの掲載雑誌から、現在世界中で出版されているみすゞの書籍まで、みすゞ作品の展開をテーマにした展示が行われました。みすゞは大正 12（1923）年 9 月に作品が投稿雑誌に掲載されると、瞬く間に投稿詩人のあいだで話題となりました。西條八十も、みすゞの才能を認める一人でした。みすゞ死後、彼女の作品は次第に忘れられていきましたが、それでも童謡仲間の間では伝説のように語り継がれていきました。しかし、先述の通りに遺稿手帳の発見により金子みすゞ作品が甦ると、みすゞ作品は瞬く間に広がり、現在では世界一五ヵ国語に翻訳され多くの人に親しまれています。

第三室では、金子みすゞ作品を①みすゞ作品が掲載されていた頃、②みすゞが幻の童謡詩人として語り継がれていた頃、③現在の世界中で親しまれていく様子の三期に分けて展示がなされました。